

インターライ方式 ガイドブック

ケアプラン作成・質の管理・看護での活用

編集
池上直己 石橋智昭 高野龍昭

MDS方式を刷新した
インターライ方式ケアアセスメント
ケアマネジメントからサービスの質管理、地域包括ケア時代の
医療介護連携を網羅したガイドブックの決定版

医学書院

インターライ方式ガイドブック

ケアプラン作成・質の管理・看護での活用

池上直己・石橋智昭・高野龍昭 編

本体3600円＋税

医学書院 ☎03-3817-5657

まず本書を手にして、新しくインターライ方式のガイドラインができたことに期待をもちました。なぜなら、ラックコーポレーション（以下、当社）では、インターライ方式の前身であるMDS-HC（在宅版）からそのアセスメント方式の導入にこだわり全事業所へ働きかけてきましたが、アセスメント項目数の多さとケアプランを導き出す工程への指導が不十分であったため、なかなか浸透せず苦慮していたからです。

本書で指摘されているように、当社でも事業所独自の簡便なアセスメント表を使用していた時期がありました。作業は楽ですが、個別性がなく、画一的で根拠が明確でないケアプランが多かったのは事実です。そこで、あらためてインターライ方式に集中すると方針を決め、全社で取り組みました。本書は実践に即して活用できるものになっており、これを活用すれば、きつとスタッフが意欲的に取り組むことが

ができると確信しています。

根拠のあるケアプランを導く指針に

なぜそこまでインターライ方式にこだわるのか、その答えは第1部に明記されています。介護保険制度が導入されて約18年経つてもなお、ケアマネジャーの課題は変わらず、ケアプラン作成の質が問われています。自立支援・重度化防止により資する利用者本位のケアプランが求められ、医療との連携の推進も一層求められています。

そのためには、充実したアセスメントとその分析・検討から課題を抽出し、根拠のあるケアプランを導かなければなりません。その工程においては、たとえ新人や経験の浅いケアマネジャーであっても、経験によってケアプランの質に差があつてはいけません。この問題を解消するのが、インターライ方式であるということを本書では示してくれています。

質の高いケアマネジメントを実現する

本書では、具体的な事例を用いてアセスメント（情報収集）の方法や各項目のチェック基準が示され、①トリガーを確認しリスクを検討する、②ガイドライン

を参照して問題の要因や危険度・改善の可能性を検討する、③具体的な課題を設定し、目標を導き出すという、まさに根拠に基づいたケアマネジメントの流れが非常にわかりやすく記載されています。本書のように、この工程を踏んでいくことで観察のスキルが磨かれ、質の高いケアマネジメントが実現できると確信しています。

第4章「よくある質問に対する回答」の、インターライ方式を使用するにあつたQ&Aもじつに有効です。加えて、第II部ではアセスメントデータから集計・算出されるQI（質の評価指標）が紹介されています。これは、QIによってサービスの質を客観的に評価し、事業所ごとの強みや弱みといった特徴が可視化されるとともに、ケアマネジャー個人においてもケアプランの再検証ができるしくみです。

本書を活用することで、個人として見直すべき視点だけでなく、事業所として取り組むことが理解でき、インターライ方式のアセスメントに取り組む意欲が向上する1冊になっています。